

石井漠—舞踊詩と展開—

片岡康子・日下四郎

桜井 勤・若松美黄（司会）

シンポジウム

基調講演、対談を経てシンポジウムに入ったが、まず司会の若松美黄氏からおよそ次のようなコメントがあった。—今から30年前の若い舞踊家たちは石井漠、高田せい子らをモダンダンスの人とは考えていなかった。どういう人がモダンダンスの人であったかという、江口隆哉、邦正美、津田信敏らであった、石井漠は過去の人という印象であった。何故ならモダンダンスとしての動きがなくてマイム的であり、学生運動の激しい時代からすると、「人間釈迦」などは時代錯誤に感じられたからで、今モダンダンスの人として捉えることに戸惑いを感じる。また石井漠の特徴として石井という名前を継がせシステムを踏襲する家元制度、力を全身に漲らせた独特の児童舞踊、文学、音楽を経て舞踊に至った経歴、組織の人間ではなかったことなどがあげられる。

ついで日下四郎氏からは漠とローシーの関わりについて次のような話があった。ローシーの西洋的考えと漠の東洋的考えの対立、また型から学ぶことに対する疑問での対立によって、石井漠は帝劇を離れ独自の道を歩みだした。ローシーの教授内容は純粋なダンスクラシックではなかったと思われるが、しかし、ひとつの形式を短期間に押しつけられたことが、漠にとっては納得のいかないものであったわけで、この2人の対立が日本の近代舞踊の出発のきっかけとなったのである。

ついで桜井勤氏からは石井漠と児童舞踊について話があったが、若松氏から「石井漠は近代社会の中で子供を通じて未来に何を見ていたのか？」また「石井漠の本音が児童舞踊に表れでてはいないだろうか、という見方でいえばどうであろうか？」といった質問があり、それに対して桜井氏は初期の頃は穏やかな踊りがあり、時代が戦争へ突入する中で時代を反映するものがでてきたと答えた。

その後司会者がフロアからの意見を求めると、次のような意見がでた。

*石井漠の舞踊は、バレエの洗練を受けない時代のモダンダンスという意味で意義があるのではないだろうか。つまり今日、バレエ技法やグラハムテクニクなど外在する様々な技法にとらわれ過ぎた舞踊が多い状況の中で、あらためて日本人

にとっての舞踊とはどのようなものであるべきかを考える時、石井漠の舞踊は我々にあるべき方向を指し示すと思われる。（松本千代栄氏）

*石井漠の舞踊は確かに30年前の時代には古いと感じさせられましたが、今回のシンポジウムを通じてあらためていつの時代にも変わらない芸術家の精神性というものを学ばせてもらった。また舞踊に存在する時間的制約によって、我々舞踊家には、舞踊とはなにかを考えると同時に、舞踊家になるという制約が問題として存在するのではないかと感じた。（葵 妖子氏）

短い時間ながら充実した意見の交換がなされ、最終的まとめとしては、一つには石井漠の舞踊詩運動が近代舞踊の出発点になったこと、二つには石井漠をはじめ20年代の舞踊家ヴィグマン、グラハムらは、共通して外在するものを規制し、簡素化することによってオリジナリティーを追求したということ、三つには石井漠が直面した西洋芸術と日本人としてのアイデンティティーの問題は今日我々が抱えている問題・課題と重なるということが確認されたといえよう。

（文責・片岡 康子）

*1989年度秋季第28回舞踊学会
『舞踊學』13-1号より転載